仙台北三番丁教会
2023年4月2日　受難節第6主日礼拝説教

ちいろばに乗ったイエス

牧師　齋藤　篤

聖書　ヨハネによる福音書12章12～19節
12 その翌日、祭りに来ていた大勢の群衆は、イエスがエルサレムに来られると聞き、13 なつめやしの枝を持
って迎えに出た。そして、叫び続けた。
「ホサナ。
　主の名によって来られる方に、祝福があるように、
　イスラエルの王に。」
14 イエスはろばの子を見つけて、お乗りになった。次のように書いてあるとおりである。
15「シオンの娘よ、恐れるな。見よ、お前の王がおいでになる、
　　ろばの子に乗って。」
16 弟子たちは最初これらのことが分からなかったが、イエスが栄光を受けられたとき、それがイエスについ
て書かれたものであり、人々がそのとおりにイエスにしたということを思い出した。17 イエスがラザロを墓か
ら呼び出して、死者の中からよみがえらせたとき一緒にいた群衆は、その証しをしていた。18 群衆がイエス
を出迎えたのも、イエスがこのようなしるしをなさったと聞いていたからである。19 そこで、ファリサイ派の
人々は互いに言った。「見よ、何をしても無駄だ。世をあげてあの男について行ったではないか。」
『聖書　新共同訳』

救い主、イエスの十字架を想う受難節（レント）も、6回目の日曜日を迎えました。いよいよ本日から、受難節のクライマックスと言える「受難週」の時を、私たちは過ごすことになります。その最初の出来事として語られるのは、イエスがユダヤの都エルサレムへ入る、そのシーンです。

エルサレムは、イエスが十字架の受難を経験することになる舞台となった街でした。エルサレムは大きな祭りが控えていました。除酵祭ともいわれる「過越の祭り」です。遠い昔、エジプトによる奴隷状態に苦しんだイスラエルの民に、神は慰めと助けを与えました。エジプト軍は容赦なくイスラエルの民に災いをくだそうとします。そんな災いから通り過ぎ、越させてくださるために、神は命の奇跡を起こされました。

神の救いをいつまでも記念するために祭りを祝う。そんな人々の思いが、この街に寄せられていました。大勢の群衆がエルサレムにやって来ました。街のなかはさまざまな地方から訪れた巡礼者でごった返していました。禍（わざわい）から解放されることを願うためにです。

そして、この年の祭りは特別でした。神は私たちに救いを与えてくださった。いよいよ「あの御方」が王として私たちのもとへ来られる。人々に慰めと励ましの言葉を与え、奇跡を起こし、病を癒してくださったあの御方が王としてこられるのだ。人から人へ伝えられたその噂は、祭りを迎える熱気とあいまって、最高潮へと達していたのです。

こうして、人々はイエスが来られるのを待ちました。彼らは長いなつめやしの枝を手に持ち、エルサレムの城門から神殿へと続く道に並び、「ホサナ！」と叫び始めました。「どうか私たちを救ってください。私たちに祝福をください。神が与えてくださったあなたこそ、私たちの王となられるにふさわしい御方なのです！」

城門の外にまで、熱気にあふれた叫び声が聞こえてきたに違いありません。いよいよイエスは、城門に入

ろうとします。しかし、イエスは「不思議な行動」に出るのです。「ろばの子を見つけて、お乗りになった」と、14節にそのときの様子が描かれています。イエスが乗られたのは、雄姿にあふれた馬ではなく、ろば、それも小さな子ろば、つまり「ちいろば」だったのです。とても大人が乗るような動物ではないのです。

＊＊＊＊＊＊

ちいろばと言えば、私たちは「ちいろば先生」を思い出すことができるかもしれません。作家の三浦綾子さんの代表的な作品のひとつである「ちいろば先生物語」に描かれたのは、榎本保郎というひとりの牧師でした。神の御言葉を愛し、黙想を通して神の声を聴き、そして従うことを大切にしつつ、その生涯を全うした人物です。

ちいろばとは、榎本牧師が自分自身の姿をイエスが乗られた子ろばになぞらえながら付けた名前です。榎本牧師は自分の著書である『ちいろば』でこのように綴っています。

> 「私の幼な友だちが、牧師になったことを知って、『キリストもえらい損をしたもんじゃのう』といったそうですが、その評価のとおり、知性の点でも人柄の上からも、およそふさわしくなかった私であります。ですから、同じウマ科の動物でありながら、サラブレッドなどとはおよそけた違いに愚鈍で見ばえのしない『ちいろば』にひとしお共感をおぼえるのです。」
>
> （榎本保郎『ちいろば』より）

なぜ、イエスはろば、それもちいろばに乗られたのでしょうか。そこに、エルサレムに向かい、十字架に向かうイエスの思いを、私たちは聴くことができるのではないか。そのように思えてならないのです。14節に「次のように書いてあるとおりである」という言葉に続いて書かれている15節の言葉は、やがて来る救い主、王について預言された、旧約聖書ゼカリヤ書9章9節の御言葉です。

> ゼカリヤ書9章9節
> 娘シオンよ、大いに踊れ。
> 娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。
> 見よ、あなたの王が来る。
> 彼は神に従い、勝利を与えられた者
> 高ぶることなく、ろばに乗って来る
> 雌ろばの子であるろばに乗って。　　『聖書　新共同訳』

弟子たちは、この時の様子を後になって悟りました。ゼカリヤによる預言は、イエスによって語られたものだったのだと。そのことが続く16節に記されています。確かにイエスによって、旧約聖書の預言は成就しました。しかし、イエスは単に、かつて預言者によって語られた言葉を実現するためだけに、ちいろばに乗られたのでしょうか。決してそうではありません。明らかにイエスは、ちいろばに乗られた「深い意味」を抱いていました。

＊＊＊＊＊＊

イエスは十字架への道をただ進まれました。それはひとえに「ちいろば」のためでした。決して勇ましくない、見栄えもしない、かわいいかもしれないけれど、到底人が乗って進むような存在でもない。イエスはあえてちいろばを選ばれた。そして、王としての歓迎を人々から受けるにあたり、「ちいろばに乗ったイエス」であることを、人々に知らされたのです。

イエスはちいろばを明らかに必要とされました。自ら十字架への苦しみの道を進まれるために、ちいろばの存在を人々へ知らせました。私はこのちいろばのために、十字架で苦しみ、そして命をあなたがたに与えるのだと。そう、これはイエスの人々に対する確固とした「決意」であったのです。

つまり、地方の町や村からやってきた人々こそ、イエスの目からすれば皆「ちいろば」に映ったに違いないのです。そのなかに「私」自身も含まれていることを、私たちはレントの日々を過ごすひとりとして、心に刻みながら、受難週の一日一日を大切にしたいのです。

＊＊＊＊＊＊

私たちは新しい年度を迎えました。仙台北三番丁教会にとって、この1年は大きな変化を味わうことになります。佐藤司郎先生の牧師辞任にともなって、無牧の期間を経験しなければなりません。主の導きであると信じ、私は1年間を代務牧師として皆さんとともに、教会の営みを歩むことを受け入れました。

私に与えられた務めとはなんだろうか。そんなことを考えながら、この1か月間を過ごしてまいりました。そして、今思うことがあります。それは私自身が「ちいろば」であることを深く心に刻みながら、1年間の日々を送りたいということです。私自身、学識が豊富にあるわけではなく、牧師としての経験も20年に少し満たない存在です。これまで牧師を続けてこられたのが本当に不思議なくらい、牧師人生を断たれるような危機を何度も経験してまいりました。

しかし、どんな時にもイエスがともにいてくださった。ちいろばの上に乗って、ともに人生の日々を歩んでくださった。そして今日も、明日も、この後もずっとともに、神の御国の希望に向かって一緒に歩み続けてくださると、心から信じたいのです。

このようなイエスを通して神が与えてくださる希望を、仙台北三番丁教会の1年間の歩みの中心に置きたいのです。受難の苦しみはやがて、復活の希望と喜びに必ずいたります。私たちちいろばを牧してくださるイエスが、必ずやよき牧者をこの教会に与えてくださることを信じつつ、神の御言葉に聴き続けていきたいと思います。

そして、皆さんの新しい日々が、ちいろばに乗られる救い主イエスとともに、豊かにありますように。主にある守りと平安、祝福をお祈りいたします。

＊＊＊＊＊＊

祈り
十字架の道を、ちいろばとともに歩まれる主イエスを、私たちに与えてくださった神、
私たちはちいろばです。しかし、そんな私たちを守り、用い、祝してくださることを信じつつ、受難週の日々を、そしてこの1年を歩む者にならせてください。ただあなたの助けによってそうなることを信じつつ、十字架の主、イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン。